

淨土

1977 - 2

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一紙一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別員承認第) 第三二五号
昭和五十二年一月二十五日印刷 昭和五十二年二月一日発行

第四十三卷 第二号



勇猛精進

宗祖は自ら愚痴の法然房と云い、祐天上人は愚心と号し、専修念仏に精進せられた。

勇猛精進

巖谷勝雄

(東京・目黒祐天寺住職)

仏道実践には先づ己のいたらざるを知ることが大切である。仏教では八正道の一つとして「精進」は最も重要である。

宗祖は自ら愚痴の法然房と云い、祐天上人は愚心と号し、専修念仏に精進せられた。

人の世は無常なるが故に強者は強者ながらに、弱者は弱者ながらに念仏即生活即精進こそ人生最大の幸福を得る道である。観經に「この人精進勇猛なるが故に……観世音菩薩は金剛台を執り、大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿弥陀仏は大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩とともに御手を授けて迎接したもう」と。誠に有難きかな、有難きかなである。

二 月 号



目 次

浄土の教えと日常生活の指針	山本啓量	(2)
——紙小消息を中心として——		
△巳の民話△桜が池の蛇息子	内山憲尚	(6)
小石川のこんにやくえんま	三好祐昭	(8)
鼎談《マスコミ文明からの提言》現代浄土教文化論(第一回)	寺内大吉・松浦行真・宝田正道	(12)
浄土教の流れ△十四△さらに差別なきなり	竹中信常	(17)
国際仏教徒ブツダ・ガヤ結集の意義	土佐舜成	(22)
毛利元就の遺訓	山野井杲琇	(26)
△随想△心のままに△	川内知光	(30)
法数術語補遺(二)	宝田正道	(32)
念仏ひじり三國志(三十四)法然をめぐる人々	寺内大吉	(37)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部



浄土の教えと日常生活の指針

——紙小消息を中心として——

やまもと けいりょう
山本 啓量

(石川県立農業短大教授)

浄土の教えは、法然上人が末世の衆生の為に、八万四千の法門の中から発見された浄土三部經に説かれた教えである。上人の時代は源平の争乱の後をうけて、国全体が末法意識が強かった。これを現代にあてて見ても、浄土教は時機相応の教えと云うことができる。

法然上人は、今日で云えば小学二年の頃に、父の時國卿が源内武者定明に夜打ちをかけられ命を落とすのであるが、父の危険を目の当りにして幼き勢至丸が玩具の弓矢で退散させたのである。この重大事が少年の心に生涯を貫く強烈にして甚大な影響を及ぼさずには置かなかった。また中学二年に相当する頃に比叡山に登って仏道修行に入ったが、これは母との生き別れである。勢至丸の

出家登山に際し、母は夫の形に残された愛児を離そう筈がない。勢至丸は「經文にも書かれています。『人身受け難し今すでに受く。仏法あい難し今すでにあう。此の身今生に度せずんば、更に何れの生に向ってか此の身を度せん』と。私を比叡のお山に登せて下さい。」と必至に母に懇願した。その時の母の心は「形見とてはかなき親のとどめてし、この別れさえまたいかにせん」と読んだ歌に、はかなくも哀れに残されている。その後我が子を慕うあまり、比叡山麓に住居を移し、子の修行成就して下山する日を待ちわびたが、母の臨終が勢至丸に知らされた時、彼は『菩薩戒經』を読んでいた。使者はこれを母の枕もとに持参したが、母はこれを手にした假で、悲

しき思いを残して他界される。親と云う字は、立木の上から、子は今どうしているか、と見ていると云う字である。父の時国卿も母の秦氏も共にこの親心に相違ない。しかも親の慈悲を知りながら、今また母を失った。勢至丸はこの時、人間苦の最先端に立ったに相違ない。

人間生活において、苦悩の重圧に堪えられず苦難に打ち勝てない者、愚癡至惡の者の為に、法然上人は八万四千の法門から浄土三部經を選ばれたのである。『無量壽經』には、弥陀の四十八願の成就が説かれ、中でも第十八願は願王と称せられ、仏の本願を信じて打ち任せて念仏する者は、済度せずには置かないと説かれている。

『觀無量壽經』には、韋提希夫人の爲の説法を機縁として末代の凡夫衆生への説法がなされている。本願の念仏を信じて称名念仏すれば、大乘經典を誦誦し仏道修行が成就した聖者のみならず、十惡五逆の罪惡生死の凡夫に至るまで、仏の本願に乗じて必ず浄土に往生すると説かれている。『阿彌陀經』には、仏が極樂浄土の依正二報を説き給うを、十方の諸仏が讃歎誑誡し、念仏の衆生を護念すると説かれている。

阿彌陀とは梵語の Amita の音訳であり、くわしくは阿

彌陀仏は無量光 (Amitābha)、無量壽 (Amitāyus) である。これは無量の光明と無量の壽命のことを云う。光明は照らすものであり、『華嚴探玄記』には「如来の光明は仏の心を凡夫衆生に知らしめる」と云われている。無量壽とは無量の壽命と云うことで、浄土に生れて永遠の生命に生きることである。仏の心を現わして、知らしめると云うことと共に並ぶものは、至らしめるでなくてはならない。仏心が現われて至らしめると云うことは、愚癡の凡夫や苦悩にあえぐ衆生を、浄土に生れしめんとする如来の慈悲の表現である。

勢至丸の仏道修行の動機と法然上人の仏道修行の成果が、最も端的に現われているものは、彼の『一紙小消息』に他ならない。この中に法然上人の開宗の御心が一切含められていると云うことができる。この『小消息』の内容は六段に分類せられるが、これをまとめて「十方に浄土多けれども、弥陀の浄土は本願に乗じて往生できる。これは誠に有り難い。」と云うことに要約せられ、これが感謝の生活の規範となり指針となるのである。

第一段には、末代の衆生と雖も、浄土往生を疑ってはならぬとして四種の疑うべからざることが挙げられてい

る。第二段は西方浄土を願ふし、弥陀に帰し奉り、念仏行によるべき道理を掲げて、弥陀の本願に乘じ称名念仏して浄土に往生することが述べられている。第三段は弥陀の慈悲に遭遇し、有り難いと云うことを五種に別けて表現されている。第四段は浄土往生は弥陀の本願に乘ずることによつたとし、歡喜の念仏は少罪をも犯さず無間に念仏を修する心と同一なることが強調されている。第五は三部經の各々に説く仏の御心の表現である。第六は本願の念仏を信ずるものの行は、報恩にあることを明かし、報恩の爲の信行が示されている。

法然上人の回心と開宗の御心は、『一紙小消息』に現われているが、この根本である本願念仏の根拠は善導大師の『観經疏』に基づいている。

一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥時節の久近を問わず、念念に捨てざるを正定の業と名づく。彼の仏の願に願するが故に。

によつて本願念仏の奥義に達したのである。「彼の仏の願に願する」とは、仏の本願に乘ずることであり、乘ずるとは自己の計らいを打ち捨て、如来に打ち任せることに他ならない。

『小消息』の第一段の疑うべからずは、「末代の衆生を往生極楽の機にあてて見るに」と凡夫衆生への呼びかけの後に続く切実な上人の心内の表現である。「行少し、罪人なり、時下れり、我が身惡し」の四種の爲に浄土往生は不可能であると疑うべからずとしている。これ等の四種の不可能は、第二段における三種の信心によつて解消せられている。「西方を願ふは十惡五逆の衆生の生るる故なり。弥陀に帰し奉るは三念五念に至るまで來迎し給う故なり。諸行の中に念仏を用うるは彼の仏の本願なる故なり。」と云われている。これは往生浄土と帰依弥陀仏と称名念仏の三種の信心を云つたのである。往生浄土を欣求し、仏の願力に乘じて、念仏申して往生することが説かれ、本願に乘ずることは深き信心によることと結ばれている。

第三段には有り難いと云うことが五種挙げられている。有り難いと云うことは、滅多にこの世にないと云うことを、今日覚めさせて頂き知らされたことを喜ぶと云うことである。有ることが困難であるが、無の中に有り得たことの感激がこもっている。更に具体的に云えば此の身今生に生を受けたことは、この身は仮りの存在に過

ぎないとしても、尊い存在であり、この身を大切にしなければならぬと云うことである。これが受け難き人身と云うことである。あり難き本願とはあり難き仏の凡夫済度の本願を意味する。発し難き仏の凡夫済度の本願を意味する。発し難き道心とは、願往生の心を起して、意欲の為に離れ難き苦界を離れ、本願力に乗じて浄土に往生する為には、極めて大切な心であるが故に起し難い道心と云ったのである。そうして本願力に乗じて浄土に往生することは「悦びの中の悦び」と云ったのである。第四は十悪五逆の者も生れることと、またたとい一念十念でも浄土に往生することができるとを信ずると云う二種の信心の尊いことを述べている。この二種の信心は、第三段の本願に乗じて凡夫衆生が浄土に往生できることを知らされて、喜び悦んで思い出しては念仏せよと云うことに他ならない。

第五段に阿弥陀仏は不取正覚の言葉を成就して、現に彼の国に在すとは、無量寿仏を引用している。釈尊は善きかな我が教えに随いて生死を離ると知見し給うと云うのは、『観無量寿經』を引用している。また六方の諸仏の証誠を信じて凡夫衆生が不退の浄土に生ると悦び給う

とあるのは、『阿弥陀經』の御心による。

第六段では弥陀の本願にあうことを喜ぶべしとし、また仏恩を行往坐臥にも報ずべしと云い、本願の念仏を信じて、称名念仏によって報恩感謝の生活を送るべしと『小消息』は結ばれている。

『小消息』の本旨は六段に分れていても、法然上人の幼い時からの御心よりすれば、浄土往生とあい難き本願にあうことの讃歎が中心となっている。勢至丸が母と生き別れの時、「人身受け難し、仏法あい難し」と云われたことは、小消息において、本願にあうことと生れ難き浄土に往生することを中心とした五種の有り難きことに展開し、母との死別に際して『菩薩戒經』を手渡されたことは、この經典に三千世界とは十億の世界であると考えられているが、これを通して「十方に浄土多けれど西方を願うは十悪五逆の衆生の生るる故なり。」とさとり、三千大千世界の十億の国の十億の仏よりも、わが母の阿弥陀様が有り難いと、『菩薩戒經』の三千世界の道理が弥陀の慈悲への讃歎へと展開している。我々凡夫の阿弥陀仏への報恩は、日常生活の感謝の生活へと展開せねばならない。

巳の民話

桜が池の蛇息子



うちやまけんしょう
内山憲尚

(鶴見大学名誉教授
日本童話協会会長)

むかし、肥後の国に、お爺さんとお婆さんが住んでいました。

このお爺さんとお婆さんには、子どもがありませんでした。お爺さんとお婆さんは、山の観音様へおまいりして、

「どうか、子どもを一人おさずけください。どんな子どもでも結構でございます。大事に大事に育てます」

と、一所懸命にお願いしました。

いつもの通り、観音様へおまいりしての帰り道、道端に小さくとぐろをまいている小蛇を見つけました。お爺さんは、

「これはきつと観音様がくださった子どもにちがいない」

と、そっと拾い上げて、つれて帰りました。

お爺さんとお婆さんは、この蛇の子に、「しどこ」と名前をつけて大切に育てました。しどこはだんだん大きくなって、いい若者になりました。そしてお爺さんの手伝いに、畑で働くことになりましたが、その力の強いことには、他の人が三日もかかるところを三時間ぐらいでやっつのけますし、邪魔になる木など、根元からスッパ

リと引きぬいて片づけてしまいます。

し、ど、こはある日、お爺さんの前へ両手をついて、

「お父さん、ひとつお願いがあります。五日の間、私にお暇をください」

とのことで、お爺さんが許しますと、ひとりで山の中程へのぼって、そこに大きな池を掘り出しました。池ができる、池の端をかためて、そこに何千本もの桜の木を植えました。

ちょうどお花見に来ていた庄屋の娘さんが、足を踏みはずして池の中へ落ちました。その時、池へ飛び込んで庄屋の娘さんを助けたのは、し、ど、こでした。それでも村の人は、

「あんな池を作るからだ」

と、し、ど、このことを悪く言いました。そして、

「いまに蛇の正体を現わして、どんなことをするかかわからないよ」

と、村の人たちは蛇息子と気味悪がって、だれもが近づきません。それでもお爺さんとお婆さんは、大そう可愛がっていました。

そのうち暑い夏が来ましたが、その年の夏は毎日毎

日、日照りが続いて、田んぼはすっかり水がなくなってしまいました。

他の村は雨乞いだとか、水騒動とか、大騒ぎをしますが、し、ど、この村では平気なものです。あの桜が池には水がいっぱいで、いくら田んぼへ引いても、水は少しもなくなることがなく、池は満々と水をたたえていました。

「よくあんな立派な池をこしらえてくれたものだ」

と、今ではみんなし、ど、このことをほめたたえるようになりました。し、ど、こは、お爺さんと桜が丘に家を建てて、三人いつまでも安楽に暮したということです。

(熊本県鹿本地方)

◇桜が池の蛇息子について◇

「蛇息子」の類話は、日本全国にたくさんあります。

鹿児島県薩摩郡、山口県周防郡の「いち」の話など化け物退治の話になっています。

岩手県の「蛇息子」は、異常成長により長者の聲となる話であります。その他に福島県岩城郡、山梨県西八代郡などに類話があります。



小石川のこんにやくえんま

三好祐昭

(東京・小石川源覚寺住職)

草創——『閻魔大王再興為六親眷屬七世父母等為当寺

諸々靈仏果円満也・施主武州江戸小石川源覚寺第四世雲蓮社白誓清岸上人・仏師竹内浄正・寛文十二壬子年潤六月十五日』以上が通称こんにやくえんま、当源覚寺境内安置の閻魔堂内ご本尊木造坐像の巨軀(高像一〇〇・四匁)を畏る畏る文京区教育委員会依頼の学者方が裏返して見て始めて知り、息を呑み、読み取った銘文(墨書)のすべてである。時に昭和四十九年四月。やがて同年十一月一日、学術調査の結果故に、文京区重宝第一号(彫刻の部)として文京区文化財保護条例の指定を受けることとなるのであるが、『將軍第二代徳川秀忠侯侍医、半井和泉守の寄進、小野篁卿(八〇二—八五二)の一刀三札の

作』であるとする長年の寺伝は完全に覆えされ、かつ昭和年代らしい明るい価値づけを持つに至った歴史的一瞬を、私は今もまざまざと憶い浮べるのである。大正末年頃の生れである私は、早くから片親となってしまうた生母に「ウソをつく」とエンマ様に舌を抜かれる」という繰り返し繰り返しで、正直であることの躰けを受けたものであったが、その当のエンマ様を発いて差上げたのは、源覚寺第二十四世として頗る鼻が高いのである。しかもその年が寛永元年開山以来、正確に数えて丁度三百年、晋山の当年とあってはまことに「快哉」である。ただし、銘文の中の『再興』のナゾ解きは今後永久に不可能であろう。『天保甲辰夏四月初五日夜富坂街失火延反当利像

經什物頃刻皆灰』と現に伝わる過去帳の記録の通り、草創当時の古い文献はことごとくを焼失しているので、全くいしえの辿り様がないのである。

隻眼録——尊顔に嵌入された玉眼は左右兩眼とも見事



閻魔大王座像

に大きい、炯々としているのは左眼だけ、右眼はヒビ割れの上、黄色く濁っておわす。これぞこれ、コンニャクエンマの異称を生んだ所以なのである。宝曆（二七五——一七六四）年代の頃、眼疾に悩む老婆があった。日頃、菟弱を好み、食事に欠かすことがなかった。患いの痛みは百方医をつくせども甲斐なく失明もはや覚悟のほか無きに至ったが、老婆は意を決して好物の菟弱を絶ち、我が御本尊大王に祈願せんとて三七日の参籠を思い立ったのである。一心不乱に祈ること連日連夜、疲れ果てての一夜のまどろみに不思議や、大王は夢枕にぞ現れ給ひ、敵かに告げ渡した。神託は『吾れ、日月にも等しき兩眼のうち、一つをえぐりて汝に授けむ』であった。驚き醒めし老婆は愈々神験疑わずなおも心をこめて堂内の暗闇の中に宝前と覺しき辺りをまさぐりまさぐり祈り続ける。やがて東の方、本郷台地に朝日がのぞいて、堂内に光が走った。意外、老婆の眼がその光を掴えた。痛みが消えた。仰いだ。尊像が見えた。驚き拜む尊顔の右眼は夢のお告げの如く、黄濁して既に盲目にあらせられたのである。感激の老婆はその後の生涯では全く菟弱を口にせず、これを只管に大王の供御としたが、伝え聞いた

庶民は『コンニャクエンマ』と呼びそやしてあらたかな神験を讃え、神徳に遣ったのであった。参詣者は遠近を問わずして競い集り、或いは菟弱を捧げ、あるいは『め』の字を象^{かたど}って描いた絵馬を掲げるのが常とされた。境内地北側部分は門前町家として市の賑いを見せ、縁日の盛りは小石川随一を誇って伝承発祥から今日に及んで二百余年を過すのである。

えんま詣で——閻魔信仰は我が国では平安末期より抬頭し、鎌倉期には一般化するのであるが、何と云っても庶民のものとして社会の底辺にまで定着したのは江戸も後期に近い文化、文政の年代からである。現代各地の諸寺院に残存する丈六の巨像の多くはこれより弘化、嘉永に至る頃のものとしてよい。吾が尊像は当時より百余年を遡り、江戸初期の作、しかも木像彩色という点で文化的価値を付与された。ともあれ、江戸時代は徒弟制度の蔓延した時代で蔽入りの行事が最も一般化した時であった。かくしてエンマ様を祀る各地の社寺の境内は『えんま詣で』として蔽入り当日、即ち正月十六日とお盆の

十六日とは空前の賑わいとなるのである。よく『地獄の釜の蓋が開く』と云い習わしているが、その日の境内地の人の波こそは釜の湯が煮え立つに似てすさまじかった。芝居小屋あり、見世物あり、大道芸人あり、物売りあり等々。正に江戸時代の庶民にとっての『一大娯楽センター』の出現である。

しかし時代は降り、今やテレビ文明氾濫の時節とも云おうか。庶民の趣味嗜好も大変革を遂げ、蔽入りの行事の如きは消え果てて、我が大王のお膝元の毎月三回、六の日毎のお縁日として往年の賑わいの名残りとしての命脈を保つに過ぎない。激しい自動車の交通を遮ぎって所謂歩行者天国を実現し、地元商店街、露天商人とも連繋した三身一体の演出だけが今様のエンマ様の復活であることを百も承知するものの、その道遙かに遠き現状ではある。

菟弱と困厄——菟弱は支那大陸乃至インドネシア地方が原産の山芋科の食用植物、その粉末に石灰を加えた膠状のものが常食とされるが、寒冷の時に乾燥の『凍り

蒟蒻』というのもある。後者は保存食である。古くは咳嗽を癒やし、肺の患いを治し、便痛に利くとして薬用された。確かに内容としての石灰含有、外形としての『滑めり』は正しくそんな効用にピッタリである。だから蒟蒻好きの信心婆さんは足腰の強い健康なシツカリ者であったに違いなく、たった一つの困ったこと、厄いがある^あとせば眼病の進行であつたのだ。困と厄とに依る造語『困厄』は音便読みで『コンニャク』である。観音經の一節『衆生被困厄（中略）能救世間苦』はシュジョウヒコンニャク・ノウグセケンクと読めるであらう。我が大王は老婆の困厄を敢て身替りして救済したのであつた。

慈悲のかため——大変な苦勞ではあつたが、私が住職になりたての初仕事は、南洋はサイパン島南洋寺に戦前に寄贈した旧藏梵鐘を無事にアメリカ本土から帰れさせたことであつた。『汎太平洋の鐘——THE PAN PACIFIC TEMPLE BELL』と命名する大祝典に、都内黨職有志が大王宝前に屋外用の大香炉一基を奉納してくれた。江戸消防記念会と称する会を組織し、伝統の木槌り

や梯子乗りや火消し纏いの扱いの保存に努めている人達だ。揃いの赤白縞織も鮮やかな絆纏姿が百余名、南の方は大金剛世界、閻魔王宮にも届けよとばかり意気熾んな木槌りの同時奉獻である。

詠って曰く、

人々の縁^よしのたから源覚寺

慈悲のかために絶えぬ香華よ

その香炉、実は台湾のメーカーに特注した全く中国様式の屋外大香炉で、昭和四十九年十日十六日の奉納以来日ねもす夜もすがら善男善女に依つて線香の薫煙の絶える時が無い。純中国服を纏われる我がご本尊に献ずるにお国振りの什器什物を以てし、慈悲の片眼と縁しの固めを一首の中に詠い込めたハイセンスの『お頭』達に対して私の方はすっかり頭を下げている次第である。

玉眼炯々、燃える唇、吼える大喝、その憤怒の偉容の意味する処は、『諸惡莫作、衆善奉行』の仏教理想実現の為のものである。現代世相を直視するに、えんま信仰の今日ほど希求され必要とされる時代はあるまい。



現代浄土教文化論

(第一回)

——本日は皆様それぞれお忙しいところご参集いただきまして、まことにありがとうございます。

今回、お集まり願いましたのは、まあ寺内先生は小説家というお立場から、また松浦先生は新聞界の第一線で現にお仕事をされているわけでし、さらに宝田先生には永年出版界でご活動されてこられたわけですから、皆様多少方向は異なりますが、いずれも現代文

談 鼎

寺内大吉
(作家)

松浦行真

(サンケイ新聞編集委員)

宝田正道

(浄土宗出版事業協会主幹)

明の最先端を行くマス・メディアの中でそれぞれ活躍されてこられたわけです。そういった意味で、マス・コミ世界の内側の立場に位置してこられた皆様方に、まあ大きく「現代浄土教文化論」などと表題を掲げてみましたが、どちらかといえば「現代文明にもの申す」というか「現代宗教界に直言する」というような形式で、どうかお気軽に鼎談という形でお話し合い願えないでしょうか。

寺内 ああ、そうですか。

松浦 そんな大きな問題を話せるかな。(笑い)

——まあ、肌でマス・コミの実際世界をお感じてございましょうし、そういう方面からみた宗教というか、宗教主義というものを批評していただきたいし、狭くいえば浄土宗と一般との見出すべき接点というか、そういったものを指摘していただければうれしいんですが……。宝田先生、どうでしょうか。

宝田 はい、そういう意図でしたら、昨年の『浄土』誌(四二巻四号)に載りました杉田暉道氏の提言なんかは一般文化人の宗教観というか、浄土宗というか念仏信仰への布教姿勢の願望をよく映していたと思います

ね。ともかく文書伝道にしても、一般への教化のあり方にしても、もう少しわかりやすい文章というか、やさしい語り口というか、ともかくむずかしい仏教というものを取り除く努力が欲しいんですね。念仏は他力易行道ということで、「南無阿弥陀仏」のお念仏すること、がもちろん基本なんですが、その教えの内容をもっと平易に伝えることはできないもんですかねえ。

寺内 その他力念仏ということで、大変トツピな例なんです、昨年のモントリオール五輪で、まあ女子バレーボールは見事に優勝しましたね。ところが、当の女子選手たちはちっとも興奮しない、感動しないんですね。ともかく今度の選手たちは山田監督に頼りつきりなんです。全部任せているんですよ。そこには悲壮観なんてないんですよ。これはまったくの他力ですよ。東京五輪での日本代表のニチボウの女子選手は、そういう意味では自力でつかんだ優勝ですね。ボクはどっちがいいというんではないんですよ。どっちも世界一になったんですからね。ただニチボウの女子選手たちは、終ってから一晩体育館で泣いて過したそうだけど、今度の選手たちにはそれがいい。ともかくすべ

て山田監督に任せ、頼りきっているんですね。これが現代に生きる他力なんじゃないかなあ。

松浦 そう、そう。ともかく山田監督というハンサムに全員がほれ抜いて、まかせきっているんですね。(笑い)そういう意味ではまさに、「現代の他力」……。もともと与えられたテーマに対する彼女たちの努力は大変なものだけだ。

寺内 そうなんだ。ところがこの山田監督が、いざ大ピンチになったらどうしようかと考えて、その時にはと思いついたのが、一休禪師の言葉だそうですね。それが、「なるようにしかならない」という言葉ですよ。

松浦 つきつめればそういうことかもしれないね。

寺内 一休さんという人は、たしかに臨済の坊主なんだが、ともかく天衣無縫で自力とか他力を乗り越えて行った人なんですよ。最後は「南無阿弥陀仏」ということを盛んにいうんですよ。

——そういう意味では、宗教というものはつきつめて行けば、一人の人間の心の中における他力ということになるんでしょうかね。

宝田 うん、そうなんだが……、たとえば他力の中で

も、浄土宗と浄土真宗では違いがあるわけなんです。教義的には色々とむずかしいんですが、ボクなんかは平易な例で、ワンマンパスの話をよくするんですよ。つまり浄土宗は、前からまず料金を払って乗る「先払いの念仏」、そして浄土真宗は後から乗って降りる時に払う、いわば報恩感謝の「後払いの念仏」という風に説明するんです。手前みそでなんですが、そういう説明の仕方が、ひとつの問題なんでしょうね。

寺内さんの先程の例なんかも非常にいいなあ。

——そのことでは、たとえば寺内先生の話のスポーツ選手なんかの場合では、何かひたむきな純粋性があるって大変感銘もするんですが、現代という時代はいわゆる不信の時代ですから、一般にはなかなか信仰とか宗教とかいうものが浸透しにくいニュアンスというものもあるでしょうね。

寺内 そう、それは法然上人の時代にあっても、親鸞聖人とかたくさんのすぐれたお弟子さんがいてたとえば『選択本願念仏集』の一書がここにある、そのことだけでは皆が一樣に念仏信仰になびいたとはどうしても思えないんだなあ。

松浦 そうなんです。そこにはやはり基盤があったんだろうな。今いわれたスポーツ選手たちがおのずからもっている純粹性に匹敵するような、念仏信仰に対する確固たる基盤が、法然上人の時代にはすでに形成されていたと思いますよ。

寺内 そのことに関連して、これは歴史的にむずかしいことなんだが、「専修念仏」ということですね。これは字義通りに解釈すれば、「もっぱら念仏を修める」ということになるんだが、専修という言葉はそうじゃないんで、ひとつの特定のグループを指すんですね。専修というのは特定の固有名詞で、この場合は「特定の念仏グループ」ということなんです。

宝田 専修団か。

寺内 そう、だから、「専修の輩」とか「専修をつぶせ」などといわれるんです。

宝田 たしかに、「念仏ひじりの集団」という意味合いに理解すべきところですね。そういう意味で、現代社会での受け入れる側の問題というか、現代人の一般常識ということを考慮しなくてはなりませんね。

松浦 そうね。今の若い人たちがそういうもの、——つ

まり宗教とか合掌して念仏するとかということね——これを求めているのか、いないのかということになると、ボクは求めていると思います。これは、こういう社会状況からして当然渴望すべきことなんです。そこで我々の側からいうと、——これはおかしい方なんだが、まあこの席ではご了承いただいて（笑い）——ともかくそういう求めている人たちに對する与え方がやはり問題となるんですね。ここにひとつ例があるんですよ。女優の悠木千帆さん、あの人に會って話をしたとき、彼女が「私の人生で一番重要なことは、仏教書との出会いです」といい出したんですね。ボクは驚いたんですが、だんだん話して行くうちに、彼女が色々な仏教書を読んでいることがわかったんです。ともかく、バリー語とかサンスクリット語とかいうことまで、彼女の口からボンボンでるんですよ。（笑い）そしてとどのつまり彼女はこういうんですな。「みんな仏教というものをとてもむずかしくしています。ご存知のように『南無阿彌陀仏』ということがあつてしょ。あの『南無』というのは、大変意味があるように思えるけれど、あれは『ああ』という感嘆詞か、ロッ

クでいえば『ビーバップ・ルール』ということなんで
すよ」というように話すわけだ。

寺内 ほお、南無のモダンさか。

松浦 そう。そう。で、彼女が余りに熱心に話すもんだ
から、僕は「出家」だということを言いそびれちゃっ
ただけだ（笑い）、ともかく悠木さんは自分の人生上
の苦勞と照しあわせて、自分なりに仏教をつかんでい
るわけですよ、ちゃんと現代のフィーリングに翻訳し
て。そういうことは本当は、宗教家側がやらなければ
いけないんでね。今こそ一番必要なのはそれじゃない
ですか。

寺内 そうだね。今、松浦氏の話したことはとても意味
深いことです。たとえば、法然上人の時代にあって
は、「南無阿弥陀仏」の南無ということも、当時の歴
史的な展開においては、ロックの新しさということでは
ないが、ともかくとても新鮮な、ある意味では革命的
な言葉だったんですよ。それは、例の東大寺の大仏
勧進僧の俊乗坊重源の発案になったとも伝えられてい
るんだが、ともかく天台念仏にはまったくなかったこ
となんですよ。それは平安末期の当時において大いに

民衆を刺激した言葉だったと思いますよ。「南無妙法
蓮華經」も引き続いてでてくる理由もあったわけす
よ。たしかに「南無」というのは鮮烈な説得力があっ
たと思いますね。

宝田 そうですね。その当時は、「南無阿弥陀仏」と文
字に書いてはいるけれど、言葉としての「南無」はな
かったと思います。源信や永観の「念仏を申す」とい
うことも、頭の中の観念の念仏であって、決して声と
なって口からついて出てくるものではなかったはずで
すよ。だから、「称名念仏」といって実際に口に出し
て唱える念仏をすすめられた法然上人は画期的だった
と思いますね。

寺内 日蓮もこれに続いたんですね。そう、今いわれた
「ロック」という発想も、強く再認識すべきことだと
思いますね。

宝田 そう「南無の再発見」ですね。ともかく新しい
ものを見直す姿勢ということが大切ですね。そういう
意味では、その浄土の念仏のあり方も新しく把え直し
て新鮮な時代に即応した新しいあり方を求めて行くべ
きなんでしょうね。

(つづく)



さらに差別なきなり

浄土教の流れ

△十四▽

竹たけ中なか信しん常じょう

(大正大学教授・文庫)

—〇〇—

第二次大戦から三十数年を経た今日、われわれの住む

地球上には、ただ一ヶ所を除いてはどうやら戦火はおさまったかにみえる。残された一ヶ所というのは、イスラエルとそれを囲むアラブ諸国である。イスラエルにとってみれば、民族の故郷、信仰の源泉であるエルサレムが数百年の長きにわたって、回教徒の手中に握られてきたということは、何としても我慢のできぬことであったらしく、大戦後、アメリカその他の自由諸国の後押しでイスラエルを建国したことは周知のとおりである。ところが、イスラエルとアラブとでは民族はむろんのこと、宗教もことなり、その違和感・差別感はいずれも仏教徒に

は想像もつかぬほど深刻なもので、それが今日まで硝煙と流血の尾を引いているのである。——信仰のちがいの恐しさがマザマザとみられるのである。

近來、わが国では仏蹟巡拝と称してインド旅行がさかんであるが、キリスト教徒とユダヤ教徒にとってそれ以上エルサレムへの聖地巡礼は大切なことなのである。そのことは十一世紀から十三世紀にかけて、前後七回おこなわれた「十字軍遠征」という歴史上のできごとにもよくあらわれている。十字軍というのは、回教徒に奪われた聖地エルサレムをキリスト教徒の手に取り戻そうとして、法皇の命令によって諸国の王侯が数千、数万の兵士を率いてはるかイスラエルまで遠征したので、これに従うすべてのものは、鎧の胸、手に持つ楯、旗、馬の鞍

にいたるまで十字架を形どった「十字」のしるしをつけて出征したのである。ところが年月にして三百年、回数にして七回、そのほかに少年十字軍も組織され、延べ数十万の人びとが従軍したのであるから、その軍費は莫大な額にのぼった。それを賄うためにローマ教会は信者から寄附をつのつたのであるが、とてもそれだけでは間に合わず、何とかして費用を捻出しようとして「免罪符」を発行したのである。キリスト教の信仰の根本は神に罪の許しを乞うて、はじめてその救いにあづかれるのである。それにはまづ何よりも神を「信」しなければならぬ。ところが、十字軍の資金である免罪符を買えば罪は許されて天国に生れることができるというのである。いわば金さえ出せば信仰も買えるということになる。いくら教会の事業（十字軍）のためとはいえ、これではいさかひどすぎる。そこで、そういった世俗の手段を経ずとも、神のコトバすなわち「聖書」を信じさえすれば、すべてのものは救われるという「信仰主義」（福音主義ともいわれる）が唱えられるようになった。

免罪符などが売られるようになったのは十字軍のためであるが、それというのも、そういうことができる「法

皇」の権力というものがその背後にあるからである。皇帝さえもローマ法皇の前に膝を屈せねばならぬという。当時の法皇の権威があればこそ、免罪符を買えば罪が免れるということが正しいこととして通用したのである。いってみれば、法皇は神の代りに人間の罪を許すことができるのである。したがって、一般の信徒は何かにつけて、法皇もしくは教会を通じてのみ、神に間接的に接するにすぎないのである。法皇の意向一つで信徒の宗教的生命は左右されるのである。

このようにしてカトリック（旧教）では、神と人とは法皇（教会）を仲介としてはじめて、人間からの祈り、神からの救いがおこなわれるのである。ところが法皇もやはり人間であり、教会もまた人間の集りであるから、常に神と同じく正しく、慈悲深いとは限らない。時として神の威光を背にして不正、不義をはたらくものなきにしもあらずである。そこで、そんな仲介を通さずに、直接、神と人間と触れ合う道がマルチン・ルーテルによって唱え出されたのである。つまり、神のコトバとしての聖書を読む。そしてこれを信じ切ることである。聖書の中で神と人とは一つになるのである。いいかえれば、カ

トリックでは神—法皇・教会—人であるのを、プロテスタント（新教）では神—聖書・信仰—人という関係になるのである。

—〇一〇—

西洋で四五百十年ほど前におこなわれた上記のような宗教（キリスト教）の大転回は、わが国ではそれよりさらに三五百十年も前におこなわれていたのである。それはいうまでもなく法然上人の立教開宗にほかならない。山門仏教・伽藍仏教と呼ばれた当時の仏教は、一般の信徒には到底読めぬ漢訳の經典を用い、むづかしい教理・教説によって困難な修行を積み重ね、さとりに至ることができないとされた。したがって、一般信徒はどうしても、否応なしに寺に行つて僧侶に頼まなければ、仏道の修行も祖先の追善をおこなえないのである。そこで法然上人はそうした仲介をぬきにして、弥陀の本願を信じ、念仏を唱えればいかなるものでも救われると説いたのである。ルーテルが「教会」というものを不用としたように、法然上人は寺を出て町に庵を結んだ。そしてルーテルが「万人司祭説」——すべて神を信ずるものは司

祭と同じく神と直面できるとしたのと同じく、法然上人も念仏さえ唱えれば「阿波之介も空阿弥陀仏もわたしと同じだ」といって、ことさらに僧侶を必要としないことを主張したのである。

時間の上では四百年ほどの前後があり、地理的にはヨーロッパと日本という隔りはあるにしても、このように「信仰不在」の宗教から「信仰主在」の宗教へと、東西の二大宗教がひとしく大転回したということは、人間の精神の歴史の上でも大へんな意味を持つものといわなければならぬ。そしてさらにこのことは、宗教の実修——つまり修行・儀礼の上にも大きな変化をもたらしたのである。

—〇一一—

仏教の儀式・法要というところ、色とりどりの法衣をつけた衆僧と、金襴の袈裟ばかりの莊嚴服をまとつて中央の高座に坐する導師、莊重なシヨウ、シチリキの響きにのつて朗々と流れる衆僧の読経の声。本尊の前にうず高くくさぐさの供物が積み重ね、ゆらめく灯明が供華を浮か出しているのが目に浮ぶ。こうした光景は、ステンド・グラ

スの七彩の輝きの中でおこなわれるローマン・カトリック教会の儀式にもみられる。仏教が漢文を棒読みで読むのと、カトリックでは現在では古典語になったラテン語でお祈りをするのが、一般信徒にはチンプンカンプンであることにはいささかのちがいが無い。また仏教では、導師は本尊仏とはるか下座に坐る信徒との中間に、しかも信徒に背を向けて本尊と向い合う。導師もしくは僧侶は仏に向って経を読んでいるのである。經典とは本来は「講会」などといわれるように、經典の講義や講説に用いられるものであって、会衆がひとしく唱和すべきものだったのである。それが、その意味内容がだんだんむずかしくなったために儀礼化して、僧侶だけが読んでも、一般の人々はうしろに坐って黙って聞いているという形になってしまったのである。しかもチンプンカンプンなのである。いってみれば「信徒不在の儀式」になってしまったのである。だからそれは漢文の棒読みであるうと、ダラニであらうと一向に差支えないわけである。そしてこのことはカトリックにもいえることで、こうした信徒不在の儀式法要がいつのまにか、ほんもののようにならるようになってしまったのである。

こういうことになったのは一体誰の責任かということになると、それは一概にいい切れぬむずかしいところであるが、いづれにしても時代の移り変りとそれにもなう人びとの信仰心の強弱、また何とかして宗教を一般大衆のものにしようという僧侶の努力の有無、その他いろいろの原因が数えられるであらう。そうしたとき「時代」というものをはっきりわきまえ、その時代に生きる人びとの心を正確にとらえ、時代と人心とにピッタリと合った教えを説いたのが法然上人であった。このことはすでに前にくわしく述べておいた。そしてそれにもなうて、儀礼・儀式の仕方にも「信者主在」のものに大転換したのである。キリスト教でいえば神と人、仏教でいえば仏と衆生とがピッタリと一つに直結する仕方となったのである。

— 四 —

まづキリスト教からみよう。

「すべてのキリスト者（信者）は祭司（儀式をおこなうもの）である」というルーテルによって、プロテスタントの儀式は形づけられている。すなわち、「プロテスタン

トの礼拝は、聖職者と信徒との区別を撤廃することによつて、原始教会の礼拝にみられた單純性、自發性、能動性を回復した」のである。くだいていうならば、僧俗の区別をなくして、ヨリ簡單で、自分でしようという心から儀式をおこなうべきだというのである。それだから、ややこしいことはすべて除いて、ひたすら聖書の文を（ラテン語ではなしに）誰にでもわかるそれぞれの國語で読むというのである。儀礼簡素化の適例は、カトリックの主な儀式である洗礼式・懺悔式・堅信礼・聖餐式・婚姻式・終油式・任職式の七つを、プロテスタントでは洗礼と聖餐の二つにしほったのである。そして飾り物も灯明・花・聖衣そして時には十字架さえも除去したのである。儀礼を簡素化し、その内容を單純化して、神と信徒との直流をはかり、したがって牧師も神と人との間ではなしに、横にいて、説教し、讃美歌を唱和するにすぎない。

「凡入報土」——平凡な人間でも浄土に生れることができるのだということを、ひろく知らしめるために浄土宗を開かれた法然上人は、それまでの僧のように仏と衆生との間に立つことをやめて、その代りに「念仏」を仲立ちとしたのである。毎度引用されるように、いささか

愚鈍の阿波之介という弟子を指して、他の弟子たちに申されるよう、

「……されば日ごろ浄土の法門とてなにごとを聞かれるぞ、あの阿波之介も仏たすけ給えとおもいて南無阿弥陀仏と申す。源空（法然上人）も仏たすけ給えとおもいて南無阿弥陀仏とこそ申せ、更に差別なきなり」

（勅伝・第十九）

なのであり、信仰の世界には僧俗の区別はなく、「信仰にとつて僧侶は無用」なのである。必要なことはただ念仏を申すことのみである。その行儀も称名念仏に集中され、それまでの諸宗のようなわずらわしい行法・法儀は一切おこなわず、ひたすら念仏を唱え、礼讃を唱和する程度であり、飾りものも一切とり払って、わずかに阿弥陀仏を安置し、僧俗ひとしくこれに向つて礼拝したのである。同法・同信・同朋・同行などという呼び名が示すように、僧も俗も同列同席で、まさに法然上人の「更に差別なきなり」というコトバがそのまま形にあらわされたのである。

（訂正。前号「賽の目と鴨の流れ……」のままならぬことをなげかれたのは、後白河法皇でした。おわびして訂正します。）

■ 国際教徒ブツダ・ガヤ結集の意義 ■

— インド山日本寺の現況 —

と さ しゆん じよう
土 佐 舜 成

(国際仏教興隆協会広報局長)

一 インド山日本寺

仏陀釈尊成道の聖地ブツダ・ガヤの日本寺建立については、去る昭和三十九年九月インド政府外務省並びに各関係方面が「故ネール首相の御遺志であり、又ブツダ・ガヤ綜合開発計画の一環としてその実現には非協力したい。」という公式表明によって財団法人国際仏教興隆協会（会長・賀屋興宣氏、理事長・巖谷勝雄師）を推進母体として広く仏教界、政界、財界に呼びかけられたものです。

昭和四十一年二月宝篋印塔を願主・橋本凝胤殿下、導

師・岸信宏殿下によって落慶、同四十五年二月国際仏教会館竣工、同四十八年十二月待望の本堂と鐘樓堂が文字通り宗派を越えて全日本仏教の名において落慶、当時は十六法要団約八百名が渡印、十二月八日の成道聖日にはインド政府からギリ大統領、ミシュラー鉄道大臣、バンドーレ・ビハール州知事、ガフオール同州首相、インド大菩提会事務総長N・ジナラタナ大僧正、シツキムのチヨダール殿下、駐印各国大公使等ご参列頂き世界に教史上に残る画期的な大慶事であった。

さて、目下第三期事業として（社）日本仏教保育協会のご尽力によって保育所を建設中、同協会の古屋道雄理事長は保育施設を仏陀に献華する如く、お供えする思いで



日本寺全景（工事中は保育施設）

努力していると言われています。せめてこの聖地だけでも一人でも多くの子供達が仏陀のみ光にふれ、教育に恵まれ人間として幸せになって欲しいとの関係者の念願です。

さらに医療施設、国際図書館、僧堂、農業技術研究所を建設し、これらを無料で提供し奉仕することによって仏道を実践してまいりたい悲願です。

さて、昨年十二月八日には開堂三周年記念並びに各国合同成道会法要が厳修され、併せて七、八、九日の三日間第二回結集が催されたのです。

二 結集について

一昨年即ち昭和五十年十二月の第一回結集に際し各国代表から次の提案があり日本側がその準備をすることとなった。

- イ 各国仏教界代表の論説
- ロ 各国仏教事情
- ハ 結集開催日

東京・祐天寺の当協会事務局並びに委員はインド、スリランカ、タイ、ネパール、イギリス、西独、ベルギー、オーストリア等十六ヶ国へそれぞれ御願いし、期限の昨年九月末日迄にお送りして頂いたものの日英印語の翻訳、印刷にかなりの日数を要し、実行委員が発する十二月一日に辛うじて印刷が出来るという実状でした。

なお期日後の原稿は今回は割愛させて頂き、いづれ機をみて交流の資とすることになったことをお詫びする次第です。

さて結集は初日の七日午前十時半から先づ当協会・巖谷理事長の開会の言葉に始まり、九日までバンコク・マハアツ僧院のP・アマラ長老の「タイの仏教」、インド大菩提会のU・ダンマラタナ博士による「仏教の新しい展望」で仏教は一部の人が言われるように厭世主義でも楽観主義でもなく、極めて現実的であると種々仏陀の論述を挙げて強調されました。

又バンジャブ大学仏教学助教授L・M・ジョシ博士は「涅槃の意味」と題して、それに相当する外道との違いを述べられ、ナーランダ大僧院のU・ジャガラ・ビバ

ンス師は「涅槃とは何か」と講演、終って質疑応答が活発に行われたことは特に印象深いことです。

日本からは大正大学教授・塩入亮達先生が「日本の仏教」として、十二月八日のこの「日」この「場所」を仏教徒にとって極めて重要な意義をもつと述べられ、日本人の仏教つまり如何にして仏教が日本人に受け入れられたかという問題、日本伝来と定着、聖徳太子の仏教の理解が後世日本仏教に大きな影響を与えたこと、さらに日本神道との融合、戦後の日本仏教について詳細に述べられました。

又中山理々師は「上座仏教と浄土教」という趣旨で、上座部仏教には命終の後、天界への転生を樂しみ、そこで更に正覚への修行を樂しむということがいわれ、これは明らかに日本の浄土教の極楽往生の信仰に似ていますと共通点なり相違点を言われました。

九日は午前九時より各国合同世界平和祈願法要の為、十時過ぎから次の諸講師によって各持時間十五分、先づ中国の譚雲山博士は老齢ながら今後の仏教のあり方を諄々と説かれ、次いでR・N・ブラサド氏、A・バルア氏が立たれ、最後に巖谷理事長の開会の言葉があつて有意

義にかつ盛会裡に終了したのです。

結集も未だ回を重ねること二回、世界の仏教徒が「仏陀の原点に還れ」のスローガンのもとに、成道の聖地日本寺に年一回会合して大乘・上座仏教の相互理解、研究、実践面・布教面の検討、さらに仏教の世界的使命を



開堂三周年記念法要次第



内陣と結集に挨拶する巖谷理事長

御互いに自覚し合うこと等、その意義は極めて大きいと思われます。

欧米識者は、西洋的思考に種々の問題があるとして真剣に東洋思想、仏教を求めていること幾久しく、私達は原点に還りつつ眼を広く世界に向け仏教の重要性を再確

認することを迫まられているのではないでしょうか。この意味で結集が回を重ねることに聖地から指導理念が生まれることを心から念願するものです。終りに臨み本結集の運営に並々ならぬ陰のご尽力を頂いたマガダ大学チベツト学講師A・トルク氏、諸般の準備をして頂いた主任駐在僧の渋谷夏雄師と佐賀知章師、畑中師、さらにインド従業員の方々に衷心より感謝を申し上げます。

信仰雜感

毛利元就の遺訓

安芸国吉田三千石の地頭から西国十ヶ国の大名に成り上がり、長州藩閥の基をさえひらいた毛利元就は、その下剋上の立身出世ぶりにおいても、またその子々孫々に伝えた堅実無比な覇業の跡からしても、確かに戦国時代の群雄中にあってもその武略にすぐれた点から名将であると評されている。

その毛利家伝来の古文書の中に、元就が隆元・元春・隆景の三子に与えた自筆遺訓がある。大方有名なものがあり、全文が十四ヶ条からなっている。日付は「霜月廿五日」となっており、弘治三年（一五五七）元就六十一歳の時のものと推定されている。因みに元就は元龜二年

やまのい こう しゅう
山野井 杲 琇

（長野県立丸子実業高校教諭）

（二五七一）六月十四日に七十五歳で病死しているから、臨終十四年前の遺訓である。この遺訓の第十二条に次の様なことが記されている。

われらは、十一歳の時猿懸城の麓の邸宅で生活していた。その節井上河内守光兼の所へ、一人の旅僧がやって来て念仏の秘事を説明する講が催されたので、大方様もその席に御連らなりなさって功德を受けられた。その時われらも伝授を願ひ、今なお毎朝祈願を欠かさず続けている。それは朝日を礼拝し十念を唱えることで、そうすることが行く末はもちろん現在の幸せまで



も祈願することになる。さらに昔の事例にならない、今生の希望をお日様にお祈り申し上げる。こうすることが一身の守護ともなればと考えて、特に大切な事として申すのである。三人の者も毎朝懈怠なくこれを実行せよ。お日様・お月様いずれに対しても同じ気持ちでよいと思う。

という内容である。元就は十一歳の時旅僧から念仏の秘伝を授かった。以来六十一歳に至るまで、毎朝太陽を拝み念仏を唱えることが日常の習慣となったのである。このように信仰とはいえ、習慣として数十年にわたって永続できることは、それなりの強い精神的根拠が必要になって来る。この遺訓の第十条で元就は「過去の争いを通じて、自分は思いのほか多くの人々を殺害した。

そこで因果応報を恐れ、毛利家の将来を心配するにつけても、罪障消滅が必要となるから、こうした信仰を得たのである。」と言っている。精神的現世利益を期待したのである。元就は戦国の武将であって、常に生死が表裏一体となった下剋上の世を生き抜いて来たのである。それだけ健在無事で生活することが、どんなに困難なこと

かよく知っていたであらう。毛利家の将来も大變に警戒したのであらう。だから生きることを大切にし、一層執着するはずである。そこで南無阿弥陀仏を唱える念仏信仰と、素朴な太陽信仰を持つことで、元就自身の生きている事の証としようとしたにちがいない。こんな意味で毎日容易に実行できる信仰こそ、物質的現世利益や精神的現世利益を願うには、よりベターな方法であらう。

もちろん戦国武将のこうした信仰は、何も元就に限るものではない。戦争という極限状況の意識下にある武将連は色々な信仰の姿を見せてくれる。そんな一つに「陣僧」というのがあるが、これは武将と共に戦場に赴く従軍僧ともいふべき性格のものである。これには時衆僧達が多く活躍したものと思われる。関係史料等からそんなことを少し考えてみたい。

武将達の何人かが、戦場に陣僧を同道させた主たる目的は、第一に武将出陣の際は、身の安全および最期の一大事の極楽往生を期すための十念を授かる。第二に戦死者の供養とその形見や最期の様子を遺族へ伝達させる。第三に僧という立場を利用してスパイ的行為をさせる。第四に落武者への手助け。第五に僧（時衆）は和歌に巧

みでもあるし、金瘡の療治をも得意とする。ということ等を期待してのことであつたらしい。(拙稿「時衆と陣僧」長野郷土史研究会機関誌『長野』第五十八号)

武將はいつでも戦場に出ねばならない。生死を常に考へねばならぬ、最も極限状況の中に置かれているのである。しかし自分からけつして死にたいとは思わないであらう。でき得るなら元就と同じ様に現在・未来にわたつて健在で幸せて平穩に生き続けたいと願つてこそ当然である。なんとかして勝ちたいとも思う。今生の希望も強いだけ、世が諸行無常であることを確認しなければならぬ。そこに人間の苦悩が生じるのである。だから武將のような環境にあればこそ、当然生きることの困難さを知り、大切だと思ひ一層生へ執着の念が起つて来る。そこに陣僧を同道させる理由がある。また極限状況下にあつても、何時も緊張状態にあるとは限らない。少しの平穩な時間、倦怠の時間があればある程死の影が大きく忍び寄る。動物的衝動の対象さへ虚空に求めたくなつて来る。死の意識化にない時の戦場では、日常社会の概念が入り易いが、それは状況の変化とともに急転することを理解し得ない人間の甘さであり、弱さである。そんな

時にも武將にとって陣僧は必要であつたのであらう。陣中で和歌の教えを得たり、金瘡の療治を受けたりすることは、焦燥感でいっぱい武將達にとってどんなに生きていることの証となつたことだらう。正に一石二鳥である。そんな武將の姿の中に、本当の信仰の一つの姿が見られるような気がする。

息災延命や平穩無事や死を一大事と考え極楽往生を願うのは当然のことであり、現代の我々でもその点においては、戦国時代が人間と少しも変わらない。ただ現代は科学の進歩の著しいので、昔の人間のように全ての事柄を宗教的に突きつめて考えこまないだけのことであらう。戦国時代には、死を待つほかに方法がなかった病氣も医学の進歩で、簡単に全快することが多いし、多少の病氣位がもとで死ぬ人など全くなかつた。けれど医学の力ではどうにもならない病氣もあるし、事故死や怪我也も以前にも増して多くなる一方である。国民経済が發展した裏では公害病死者も多くなり、誰もが長生きできるとは限らないので、息災延命や平穩無事などは、誰もが心中に切願していることに変わりはないはずである。それに男性として、金持ちになりたいとか出世したいとか

思うことは、誰もが願っている。そのために多少の信念を曲げてまでも、たやすく人に陥ったりこびたりしても何んとも思わず、逆に多少他人を犠牲にしても生存競争の激甚な現代社会のことだから当たり前だと考える人が多いようである。しかも自分や家族の身の上に多少不幸なことが起きても他人を犠牲にした報いだとか、罪だとかは考えないようである。この点やはり科学的に割り切つて合理的に考えようとする現代人の特色でもあらう。しかし戦国時代は、文字どおり群雄割拠の弱肉強食の世の中であつて、現代のような生存競争の激しさといった程度のものではない。現代の日本は高度な経済発展を遂げ、国民一人々々の暮らし向きも良くなる一方である。社会福祉も満足とは言えなくとも、ずっと昔よりよくなつた。そうした面では安心して生きることができると、普通に生活するなら七十や八十歳まで生きることが充分可能である。だから現代人は生きることの大切さや必要性、生きがいというものを考えないのではないだろうか。そんな意味で生きることへの執着が少くないようにも思う。画一的で非立体的思考の人間も多いし、人間は社会的動物であり、社会は人間の生活にとってどん

なに切要であるかを考えようとする意識も少くない。自分の社会的責任を顧みることなく、何時でも不平や不満ばかり言うことを意識している人が多いように思う。エゴイストでもいい、非エゴイストでもいい、とにかく徹底して生きること大切なことである。そこに生きることへの執着も湧いて来るような気がする。徹底して生きることは、いづれにしても人間の幸福に貢献していることになる。

ともかく現代人は、戦国の武將達のように生死が表裏一体というような極限状況に置かれることが少なくなつた。安心して生活できるだけに、生ることへの執着に欠けている。だからやたらと、その信仰も、盛んではあるけれど複雑で多様化して来ており、計算づくでの現世利益を望んでいるように思う。もっと見逃してはならないものは、見逃すことなく真実を見つめて生きようとするれば、当然生への執着も増すはずである。そこに生まれた、しかも延年転寿の物質的現世利益と罪障消滅の精神的現世利益の均衡のとれた信仰こそ、形や対象はどうあれ、純粹で価値ある現代人に相応しい信仰にちがいない。どうもそんな気がする。

随 想

心のままに〔一〕

川 内 知 光
かわ うち ち こう

本尊美利茶道翁

小泉八雲さんは日本名を使われましたが、ラフカディオ・ハーンという本名とはひどく違った印象を受けます。これに反して、本尊美利茶道は、隣村上賀茂に永く住んでいられたことが、本国名はボンソンビー・リチャードといい、その音をそのまま漢字で表記したのです。英国の伯爵の嫡男であるんです。昭和十二年十二月十日に亡くなりました。ちょうど西方寺に由縁のある太田垣蓮月尼と同じ忌日です。大正四年

御大典の際『日本皇室譜』という著書を公にしたり、主として神社研究に関する多くの著書があり、また今上陛下が皇太子の頃

欧州訪問旅行の途次、香港に立寄られた時は通訳接待をせられたこともあり、京都府立一中に無給嘱託として英語を教えられたこともあるのであります。

本尊美翁（翁といっても六十歳で亡くなっていられるのです）は、日本人以上といっているのは、どの日本風生活をせられた方で、現に西方寺什物になっている黒檀まがいの座机に坐って、日本の着物を着て、玉露茶に和菓子といった趣味で、便所も日本式そのものだったのであります。

清岡伯爵、山本一中元校長らが発起して記念碑を造られたのでありますが、妻子のなかった本尊美翁の住宅は、もちろん人手に渡ってしまい、さりとて道路に建てるに

はいろいろの制限があつてせっかくの記念碑の置く場所がないのであります。いろいろと相談の結果、西方寺の上賀茂の別所墓地内に建てさせてほしい、と三、四人の発起人の方が来られたのであります。私は「墓地内に記念碑ということにも問題がありますが、今後の掃除その他の管理をどうせられるのですか、仮りに一時金として頂いても今後貨幣価値の変動もあることですから、このことをどうお考えですか」と尋ねました。これには発起人の方々も返答の仕方がなかったのです。

本尊美翁は、日本人以上に日本を愛された方です。私もなんとかしたいと思いましたが、それで「西方寺境内にお建てになつてはいかがですか。境内だったら西方寺において西方寺のある限り当然お掃除はいたしますから」というので、本尊美翁の碑が今厳然と建っているのです。そして今も除幕式の写真が残っていますが、五十余人の参列者があつて仏式による除幕式を取り行なつたのです。

ところが、西方寺の公式の承諾書がほし

い、というので、世話人総代に印鑑を頂きに上ったところが、「和尚さん、今日英会談を行なっている最中です。日英関係は悪くなる一方です。下手に出ると昭和さん、憲兵に引っぱられることがあるのではありませんか」といわれるのです。浅慮の私も驚いたのです。その奥までは考えていなかったのです。しかし私は申しました。「日本人以上に日本を愛して下さった本尊美さんですから、申し開きはできると思います」こうして一切筋書どおりに運ばれたのであります。

立派な遺産

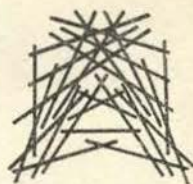
Yはんな私よりも七歳年少です。Yはんな学校の成績もよく雄弁家であり、私のあと、村の青年団長もやり、人望もよく、将来わが郷党のために大いに働いてくれる人だと思っていたのです。そのYはんとも五十年も交友が絶え、ある時ふとお会いする機会に恵まれました。その時、「君は若い時から期待をかけて、もっと村のために、あるいは広い世界に働いてくれる人だと私

は思っていたのに、あまりそのようなことがなく、不思議に思っているが、一体どうなっているのか？」と尋ねました。Yはんに曰く「妻が病弱で今年十七回忌をつとめたほどで、九人の子供ができて、長女は幼少の頃死亡したが、私から分家した身分で田畑も少く、私が一人農業をして妻子供には一切助けて貰わなかった。八人の子供のうち二人は大学に入れて、一人は今アメリカにいるが、その間貧乏で貧乏で人と立話もできない状態だったので、川内さんのところへもお話に行きたいと思ったことは何十年もあったのですが、だた子供一筋に貧乏暮しをして来たのです」というのです。噂さに聞けば、二人は大学を卒業して全部揃って実に立派な者ばかりだとのこと。Yはんな郷党のために尽す以上の立派な業績を残した人と賞めてあげたいのです。

勝負ごと

終戦後青年団を造ろうということになって、若い人たちが集りました。私一人長い間青年団長をやったことがあり、山城八郡

の青年団長までしたことがあるというのが老人が呼ばれたわけでありました。N君が中心だったようですが、初対面に近い連中の集りですので、みな紙片を配って住所氏名と好きなことと嫌いなことを書いてくれ、というのです。私は好きなことに勝負ごと、嫌いなことに何を書いてよいのかわかりませんのでジャズと書いたのです。そして各々が自分のことを読みあげるのです。私はこれは印象に残るおもしろい自己紹介だと思ったのです。ああ、あの人はライスカレーの好きな人だとか、あの人はんじんの嫌いな人だとか……。ところが、私が好きなことは勝負ごとと読みあげたとき、みな変な顔して私を見るのです。あの坊さんバクチが好きな人かというわけ。私もこれは説明を要すると思って、「人生は一生涯の日々が勝負だと思えます。今月は負けだ、今日は溺れかけている子供を助けた、勝ちだということです。しかしこれを意識して日を終ることは不純です。無意識のうちにこうして生きて行きたいではないか」と説明したのです。



法数術語補遺（二）

たから
宝田まさみち
正道

四十二劫 しじゅうにこう

極楽浄土の仏の寿命が無限に長いことをいう。『無量寿経』に説くところで、訳本によって劫数を四十とするもの（宋訳・唐訳など）もある。浄土宗では、四十二を分解して、十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺の四十二位（菩薩が修行してさとりに至る段階）とする。もと『瓔珞経』に説くところで、天台ではこれに十信を加えて五十二位とし、十信から十回向までが凡夫（十信を外凡、あとの三十位を内凡または三賢と呼ぶ）で、十地の初地以上が聖者の位に入る、という。

四十八願 しじゅうはちがん

阿彌陀仏が法蔵比丘であった頃に立てた四十八条の誓願をいう。『無量寿経』に説くところで、もしわれ仏を得たらんに、これらすべての願が成就しなかったならば正覺を取らじ、と誓ったもの。その中でも大切なのは第十八願（念仏往生の願）で、この本願（王本願）を依拠として専修念仏の浄土宗が立てられた。

この「四十八」という法数は、平安中期以来、すこぶるもてはやされ、弥陀の誓願の数に因んで仏事を行なっ

たり書物の巻数に取入れたり、さまざまの行事の日時・人数などにも活用されて、広く一般の流行となった観がある。たとえば、念仏を修したり、道場を造ったり、仏壇を回ったり(地藏講)するのに、いずれも四十八日、四十八時、四十八所、四十八匝、四十八人などと限定するのに使つてあとが見られる。法然の弟子空阿は、その徒四十八人とともに四十八夜の称念を始修し、同じく隆寛は毎日『阿弥陀経』四十八巻を誦誦するとともに、「若我成仏十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覚彼仏今現在世成仏当知本誓重願不虚衆生称念必得往生」の经文が四十八字であることを「本願の数に当れり」といって喜んだ。また、西山証空は不浄の時に四十八度も手を洗い、山伏作仏房は熊野参詣の歩みを運ぶこと四十八カ度、勢観房源智と三祖良忠が東山赤築地で宗義の談合を行なったのも四十八日、その良忠が国ごとに梵字を開創すること四十八カ所、みづから仏像を彫すること四十八軀なども伝えられている。有名な『源平盛衰記』には、灯籠大臣といわれた平重盛が今様を歌つて行道した時のありさまを、四十八人の女房達、衣装花を折り蘭麝らんじやの芳を新たに、日没静かに礼讀し念仏貴く唱へつ

四十八間を回」(燈籠大臣の事) ったと並べている。功德院舜昌が法然伝を大成するのに「四十八巻」(勅修御伝)を取入れたことは、いうまでもない。

このように、「四十八」という法数の活用率はきわめて高く、それだけ深く四十八願を重んずる浄土教が一般の関心と呼んだ模様が察せられる。

なお、四十八願のことを「桑願」と別称する。これは「桑」という字の旧字「桑」を分解すると「十」が四つと「八」が一つ、合せて四十八、ということから来たもので、出家・僧侶のことを「桑門」というのも同じ理由からか、あるいはこれは大乘戒の初門である「四十八輕戒」を守る人々という意味に基づいた術語であるかもしれない。

四十九日 しじゅうくにち

七七日間で中陰のこと。仏教では、人の死後四十九日の間は、中有(中陰)に迷つてどこへの転生しえない状態にあるとして、七日ごとに成仏するための追善供養を続けるべきだ、と教える。俗に「宙に迷う」というのも

この「中有」から出た語で、中有を中陰というのは、われわれの目に見えない「かげ」で起るからだ、といわれている。

息を取った瞬間から中有は始まるわけであるが、普通四十九日の数え方は、関東では亡^{なぐな}ったその日を第一日とし、関西では死の前夜（建夜）から数えるところもあるようである。七日目ごとに読経供養して四十九日目、いわゆる「満中陰」で、忌明けとも称する。

五十三善知識

善財童子が、文殊菩薩の指導によって道を求めるために訪ねて歩く、という五十三人の善知識（『華嚴経』入法界品）。この人々の職種はさまざまで、その回答はさまざま多彩である。

東海道五十三次は、この故事からとったといわれている。

五十三仏

法蔵菩薩（後の阿弥陀仏）の師である世自在王仏以前の

五十三仏。『無量寿経』に説く浄土教の過去仏思想で、錠光如来以下処世如来までをいう。五十三という数は、経によりまちまちであるが、普通、「仏名会」を修してこれら過現未三世の仏名を唱え、年内の罪障を懺悔、消滅する点では変らない。

六十六部

普通略して「六部」という。一種の諸国行脚僧で、書写した『法華経』を、当時の日本六十六カ所の霊場に奉納して歩いた。後には、単に金品を行乞して歩く巡礼にもこの称を用いるようになった。

八十随形好

八十種好（↓）とも八十随好ともいう。仏身の特徴として八十とおりの微細な点を数えたもの。三十二相（↓）が比較的顕著な特徴であるに對し、こまかで、見にくい。「相好」（かおかたち）は、これら二つの熟語からできたといわれている。

百味飲食ひやくみ しょんじき

種々様々な、おいしい飲食物。小さな引出しのたくさんついた、漢方医が薬品を収納しておく箆筒のことを「百味箆筒」という。

百八煩惱ひやくはちぼんのう

煩惱の数の多いことをさす。インドでは、このほか、念誦や珠数、法門、鐘などを示すのに多く百八という数字を使うのが習慣となっている。その根拠は明らかでなく、異説もあるが、煩惱の場合は、六根、すなわち眼・耳・鼻・舌・身・意のそれぞれに六種を数え、合せて三十六、それが過去・現在・未来の三世にわたって積み重ねられるから、すべてで百八になるという。除夜の鐘として知られる「百八の鐘」も、一年中たまった煩惱の罪障の垢を洗い清めて新しい年を迎えるため、といわれるのである。また、中国で始まった朝夕の鐘は、曉に眠りを覚まし、暮れに迷いを覚ますところから発案せられた、

というから、いずれにせよ、心への警策を目的としたものと考えられる。

二百五十戒にひゃくごじゅうかい

比丘の守るべき僧伽における基本的な戒(具足戒)として二百五十種を規定した小乗部派仏教の戒をいう。波羅夷四、僧残十三、不定二、捨墮三十、單墮九十、提舍尼四、衆学百、減諍七という内容であるが、書物によって数に若干の相違がある。このうち、たとえば波羅夷は、教団を追放するに価する、もっとも厳しい刑罰で、①女性と姪事を行うこと、②盗みをする、③殺人を犯すこと、④未修行にもかかわらず大妄語しておのれを誇示すること。比丘尼は、これにさらに四種が加えられる。また僧残は波羅夷ほど比丘の生命を失うまでの重罰ではないが、これに次ぐもので、故意に他人も譏ったり、わざと精液を漏らしたりすると、この罪に問われ、一定期間、僧尼の資格を剝奪されて、六日間の禁足などの罰を課せられる。

四百四病

人間の病気の総称。仏教では、人体を地・水・火・風の四大(四元素)からできている、として、病気のことを「四大不調」というが、この四大の各々に百一の病気が生ずる、という。また、これらを二大別して、冷病(風・水から起る)と熱病(地・火から起る)とすることもあ

る。
この四百四病の分類については、中国の陰陽五行説にも似たようなのがあって、唐の孫思邈の『千金要方』という書物(六五〇頃)によると、五行の一々に八十一病あり、これをトータルすると四百五病になって、やはり仏教の四百四病に近い、ということになる。大体、インドの伝統医学では、四大のアンバランスから発病するという根本理念に立って、アーユルベダ(寿命聖典)では、基本概念として、風と熱と痰による三種の生命複合説(トリ・ドーシャ)すなわち、精神や体液まで含めて、病気を人間の身体全体としてとらえる考え方が主張されて

いる。そして、治療の面では、植物でも果物でも穀物でも、とにかく、食べられるものはすべて薬になる、という思想に満ちていたことが注目に価する。なお、インド医学に関しては、東方研究会の会報(九)に、「特集・インド医学」として文献も紹介されているから参考にされ

「浄土」教化トラクト

『ひがん会』

新書判・表紙共八頁

定価一部二十円(二〇〇部以上 十九円)

送料実費

○檀信徒の皆様へのご施本用にどうぞ広くご利用下さいませ。なるべくお早目にお申し込み下さい。ご便宜はできるだけおはかり致します。

発行 法然上人讃仰会



念佛ひじり三國志

(三四)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

高野山の杉はどれも天に向って、まっすぐに伸びる。いじけた気配や迷いは、全くない。

南風の紀州とは言え、此処まで登つてくると、寒気はきびしく冬の雪もかなりのものだが、やはり樹心に南国の精気がこもっているからであらう。

弘法大師がこの地を終焉の仏国土と選んだ理由がうなづける。空海はほんらい明活な宗教者であった。陰湿な瞑想や修法を嫌ったようだ。彼の心は、仏法を天空快々なひろがりのなかで、とらえようとした。

永遠なる天。そこへ向ってまっすぐに伸びてゆく高野杉は、ひとすじの懸け橋にも見えたことであらう。

空海が眠る奥之院の廟へ登るとば口に橋がある。右側に水向地藏があつて、参詣者が水を手向ける習わしは現代まで続いている。

この橋までやってきて、はたと立ちどまり、杖をそこに立てたまま引きかえしてしまつた。その杖が杉になつて、高々とそびえた、という伝説が残っている。

その杉を、「明遍杉」と呼ぶ。

もちろんその明遍は、本篇にしばしば登場してくる僧都明遍である。

<高野杉>



前号のあらすじ

四天王寺で迎えた初めての朝。捨丸と馬粥は信阿弥陀仏に連れられて托鉢に出かけた。馬粥はそこで「布施行」のなんたるかを肌で感じる。「布施行」とは大乗仏教の眼目である六波羅蜜の最初に置かれる重要な実践行である。ここで馬粥―豊田長門という武人が後に空阿弥陀仏となる種子、これが彼の心の土壌に植えられた。西門の僧房に捨丸主従が戻ると、義経の一行が武蔵坊弁慶を先頭に出かけようとしていたが、はやる捨丸を押さえたのは馬粥であった。しかし、馬粥はまだ三位中将重衡の臣下・豊田長門であった。俊乗坊重源の助けで吉野へと落ちのびた義経のもとへ静女を送り届ける絶好の機会を逃しはしなかった。

吉野蔵王堂に近づいた時、馬粥らは静女をねらう荒法師の策謀に陥る。静女を守ろうと一人で果敢に闘う捨丸であったが、力も尽き非業の死を遂げる。捨丸の遺体を前にした馬粥はもはや豊田長門でも馬粥でもなかった。

伝説は、なぜ明遍を橋の袂で立ちどまらせたのであらうか。

悟りを求めて、仏にならんとして、その晩明遍は靈域へはいろうとした。ところが諸仏が充滿していて、到底自分なぞが割りこむ隙はない、諦らめて引きかえした、と伝説は語る。

明遍が、真言密教を捨てて、法然の念仏に帰依した事

実を象徴するような伝説である。

道元禪師は正法眼藏隨聞記で、次のように記している。

伝エ聞ク。故高野ノ空阿弥陀仏（明遍のこと。前章の空阿弥陀仏は同名異人の念仏ひじりだ）ハモト顯密ノ碩徳ナリキ。遁世ヲ待チ、念仏ノ門ニ入ツテ後ニ真言師アリテ来リテ、密宗ノ法問ヲ問イケルニ、彼ノ人答エテ曰ク「皆忘レオワリヌ、一字モオボエズ」トテ答エラレザリケルナリ。コレコソ道心ノ手本トアルベケレ。ナドカハ少々ノオボエハアルベキ。然レドモ無明ナルコトヲバ言ハザリケルナリ。一向念仏ノ日ハサコソアルベケレトオボユルナリ。今ノ学者モコノ心アルベシ。

明遍は若年のころから、しばしば高野山にこもっていたようである。

父信西入道の十三回忌法要をその遺児らが思い立って、澄憲法印らが高野山にいた明遍に使いを出したとき、「遁世の身にて待れば、得参らじ」ときっぱり拒絶した逸話が沙石集にあり、その故事はすでに紹介した。

明遍僧都が高野山の東別所に蓮華三昧院をひらいて、八人の弟子たちと念仏生活にひたるのはさらに後年のことだが、この文治年間の初頭にもしばしば訪れては、蓮華谷でひとときを過していたらしい。

遁世のためばかりではなかった。明遍にはだいいじな「人命救助」の仕事があった。

その日、明遍は高野山へ登った。文治元年の夏である。折しも高野山では全山をあげて万灯会が奉修されていた。

貧女の一灯、長者の万灯。

と呼ばれる伝統の行事である。

弘法大師の靈廟をおびたらしい燈籠で飾り、「智恵の光明をかかげて、生死の闇を照らす」——大師の遺徳をしのぶ。

しかも今年の万灯会には、燈籠大臣が臨席するのであった。

燈籠大臣は、すでにこの文治元年には生存していない。小松内大臣平重盛のことだからである。

重盛は他界したが、その長子維盛がいた。

維盛が高野山に潜伏していると伝えたのは、例の大仏

勸進上人の俊乗房重源であった。重源はその情報を明遍にもたらしただけではなく、彼の兄弟らを通じて後白河法皇に維盛の助命を頼んできたのである。

法皇の「色よい返事」を得て、いま明遍は高野山へ登ってきた。

蓮華谷の別所で、明遍は重源と会った。

「時機が良かった」

と、朗報をいきなり匂わせた。

「時機が……」

「万灯会であろう。法皇もよく記憶しておられた。故小松内府の加護で、鎌倉どのは維盛卿の一命なぞは論外、今後は共にたずさえて、という返事だったそうな」

「それは良かった」

重源の表情もほころんだ。

平維盛は、敗戦によるただの落人ではなかった。むしろ積極的に和平への行動をえらんできたのだ。

つまり平氏一門が四国屋島へ退いたとき、維盛は兵船三十隻をひきいて屋島を脱し、紀州へ上陸、自らは高野山へ引きこもった。兵船をそのまま義経軍へ提供している。

だから一ノ谷以後の源平合戦には参加していなかった。戦争責任を問われるはずのない立場であった。

そうした事情は、鎌倉へ送った法皇の使者によって、る頼朝に伝えられている。

一刻も早く鎌倉へ下向されたい。お目もし致したい。

という「色よい返事」がかえってきたのだった。

その夕べの万灯会は、にぎにぎしく奉修された。

燈籠大臣重盛の遣子維盛が宰官となったのである。高野山の山麓にひそむ平家の残党、ひそかに心を寄せる周辺の有力者たちがこぞって物品を献燈に添えて寄進し、おびたしい参詣者を数えた。

「新しい平家が再興したようなものだ」

と、重源は眼を細くしている。

このひじりには源家も平氏もない。みんなが平和に榮え、仏法を興隆してくれば、それだけで満足なのである。

明遍は久々で平維盛を見た。最勝講の帰途、蹴鞠をしていた少年の姿、以来であったであろう。

平家の公達のなかで最高の美形とうたわれた維盛。やつれはどこにも感ぜられず、まさにいま男盛りの涼やか

さであつた。

「いろいろとお骨折、心にしてみています」

すでに重源から事情を聞いた維盛は、丁寧に挨拶した。

「いや、これも故小松内府のご遺徳でございましょう」

「明日にでも山を下ります。都へ出て……」

まっすぐに鎌倉へ、とは言わなかった。維盛の胸を、

京都へ残してきた妻子との再会の場面がかすめたのは間違いない。都落ち以来、かたときも忘れ得なかった北ノ方の肉体であり、愛子六代の幼な顔である。

明遍は、あの昔おごりたかぶった公達の顔を思いうかべている。

「わたしも平治の乱以後、しばしば思い知らされましたが、人の心はあまり頼りになりませぬ」

と、釘を刺しておきたかった。

一一

明遍はいかめしい宗教儀式を、ほんらい好まない。好まぬ以上に、軽視しなかった。そんな形式をして何になる。仏の心から遠ざかるばかりではないか。

動乱に採まれた苦い体験が、深く遁世の心を明遍に植

えつけたのかも知れない。そして学問の世界へ身をひそめさせた。

だからにぎにぎしい万灯会の法座に、いつまでも列なつてはおれなかった。明遍は、僧侶たちがとなえる理趣經の声を背にして、ひとりそっと燈籠堂を脱した。

闇の樹林を散策した。

まばゆい燈火のもとよりもこの闇の底に、何か手ごたえがあるように思われてならないのである。

その手ごたえ。

闇の底に眠る死霊との対話であつた。

高野山には古くから焼いた親族の骨を此処に埋葬し、

弔らいつつも兜率天へ復活する信仰があつた。弥勒の浄土思想である。

だが、果たしてほんとうに復活できるのであろうか。

近ごろ明遍はこの弥勒思想に疑惑をいだいている。

復活できず、それこそ復活しそこねたとしたら、靈魂はどうなってしまうのであろうか。幽鬼となつて、この山奥をさまよい、放浪していなければならぬ。

明遍には、そんな亡霊が満ち満ちているように思われなければならない。

人が近づくと心配がした。

どうやら燈籠堂を出たときから、あとをつけてきたような心配だ。

「明遍僧都……」

「誰か」

「武里（たけさと）と申します。小松家に仕えてきた舎人でございます」

「小松中將の侍者か」

「はい。ご先代重盛大臣にも仕えました。鎌倉どのが助命されるというお話、ほんとうでしょうか」

「法皇は、そうおっしゃられた」

「わたしには信じられませぬ」

断定的な言い方であった。

「うむ……」

明遍はいまいまいな合點を返さずにはおれない。

京を登ったときは、いやつい今さっきまで、この内報を微塵も疑ぐつていなかった。それがまばゆい万灯会からこの杉木立の闇へまぎれ出てきて、俄かに確信がゆらいだ。

まばゆい明光がつねに暗転するのがこの乱世のならい

ではないか。

あの鹿力谷事件のとき、平相国清盛の手が大納言成親の身に及ぶとは、平氏一門の誰が想像し得たであろうか。成親の妹は小松内府重盛の北ノ方であり、その娘も公達維盛の許婚者であったからだ。平家の中樞と最も親密な姻戚であった。

しかも大納言成親の殺されたが、連座した者のなかで最も酸鼻をきわめた。

それが武人のやる政治というものだったのだ。鎌倉頼朝も武人であり、内命を自分に与えた法皇もまた源平の武人政治のなかを游泳してきたお方なのである。

「鎌倉どのは、亡き平相国さまが、ご自分を助命したために今日源平が逆転した運命を、しかとご存じます。平家の血統を根絶やしにするはずです」

卑しい舎人にしては、正確に事理をわきまえていた。

あの平治の乱で、平相国清盛はわが母池ノ尼の請いを容れて左馬頭義朝の遺児頼朝を助命した。わずかひとすじの源家の血脈が、わずか二十数年にして平家滅亡を招いたのであった。

「それで、どうしようと言うのか」

「中将どのは明日にでも京へお帰りということですが、絶体にお止めしたいのです」

「このまま高野にひそんでおられることが得策になるのだろうか」

「いいえ、すでに助命を願ひ出た以上、中将どのは所在も知られたはずです。じきに追手が此処へも迫ってくるでしょう。わたしは中将どのを熊野へおつれする所存でございます」

「うむ。それも一策だな」

「明遍僧都、お願いがあります。ご帰洛を思いとどまられるよう僧都から中将どのを説得して頂きたいのです。

中将どのは一日千秋の思いで北ノ方や愛子六代さまとの再会を思いこがれていらっしやいます」

「わしが説得したとて、お聞き入れにはなるまい」

「僧都、あなたは当代並ぶものなき学匠とうけたまわっております。往生の正しい姿、時機を説き聞かせるのが、あなたのおつとめでございましょう」

俄かに舍人武里の口ぶりは押しつけがましいものになつてきた。

「往生と言うからには中将どのは命はどうなるのか」

「どう考えてもご延命の道はございませぬ」

きっぱりと言ひ切る。

さすがに明遍はムツときた。

「往生の方法は中将どのご自身がさがせばよい。わしらかとにかく申す筋上いではなからう」

「それは違います。中将どのは名門小松家のご嫡子。平家の統領でもあるお方でございます。女々しい死にざまをなされたら一門の永遠の恥辱。是非立派な往生を遂げて頂きたいのです」

なるほど維盛は重盛の長男。平家の嫡流であつた。父の死後は当然、一門の統領に就任すべき立場だ。

だが生母は卑しい出自で、一門から軽んぜられていた。そこには維盛自身の怯弱な性格も重視されぬ理由になつてゐる。せつかく起用された頼朝追討の総司令官も富士川の対陣で一戦もまじえずに逃げ帰るといふ醜態を演じた。

都落ちした平家は維盛を無視し、政治は宗盛、軍事は知盛などと叔父が宰領した。維盛が屋島の陣中から軍船三十艘をつれて脱走したのもこうした不満が爆発したからにほかならない。

＜補陀落渡海＞



長年仕えてきた舎人武里には、主君の怯弱さに切齒扼腕の思いであつただろう。

それにしても卑しい舎人の身分で、主君の往生の問題にまで干渉してゆくとは越権も甚だしいではないか、と明遍は思った。

「立派な往生を小松中將に遂げさせると言うが、何か腹づもりでもあるのか」

明遍はまじまじと舎人を見た。

「熊野権現に参じたあと、那智へゆき補陀落渡海をして頂こうと考えております」

「補陀落渡海……」

「顕密の学匠でいらっしゃる明遍僧都。それ以外に正念往生の方策はございますまい。いかがですか」

勝ち誇った口ぶりであつた。

補陀落渡海——

いつのころからこのようなゆがんだ往生相が、この国にもたらされたのであろうか。

補陀落という永遠不死の国へ渡るための自殺行為なの

三

である。

まず那智の浜ノ宮で殯船（もがりぶね）を仕立てる、と明遍も聞き知っていた。

殯船は文字どおり死者の船、横槽であった。一種の屋形船で、屋根は入母屋にふき、四方に鳥居を配する。入水者をこの内へ押しこめ、密閉する。帆が一本、立っている。南風にのって沖へ出てゆく。監視船が二三艘これに同行する。完全に大海まで流れ出たのを確認して、引揚げる。

以後は単独で漂流だ。入水者は密閉された殯（もがり）屋形の内で餓死するか、転覆して水死するかである。そしてこの死が補陀落の国へ往ける最良の方策、と信じこむ呪法であった。

むろん仏法には、そんな往生相はない。

明遍は補陀落渡海と聞いた瞬間、父信西入道の死を思いうかべていた。

平治の乱の突発時、信西入道は関東の山奥に穴を掘り、みずからの身体を埋没させた。竹筒だけを地表に突出させ、それが呼吸して即身成仏に至るまで呼吸し続けた。

あとで知ったのだが、父はじきに追手に発見され、掘り出された。その折すでに絶息していたかどうかは、ただすすべもなかった。

ただ明遍は、都大路にさらされた父の獄門首を目撃している。その表情を確認した。

何という醜さ。妄執でゆがみきった顔であった。

何で、これが即身成仏であろうか。

少年だった明遍が、遁世の志を立てたのもじつは父のあの死に顔が動機となっている。

古今東西の学殖に通じた父信西は、最後の瞬間に進退を誤まった、と断ぜざるを得ないのである。人間にはもつと素直な、自然な往生相があるはずだった。

「お前は、どこでそんな補陀落渡海なぞを聞いてきたのか」

明遍は、鋭い口調で舎人武里を追究した。

「これは滝口入道さまのご指示でございます」

「滝口入道……」

明遍には未知の名だった。

武里によると、滝口入道はこの高野山に棲む学徳兼備の大ひじりだというのである。維盛中将が此処へ入山し

たのも滝口入道を頼ってきたんだそうである。

「そのようにすぐれたひじりが、すでに指示しているのであれば、今更わしがとやかく申す条はあるまい」

明遍は突っぱねた。

「補陀落渡海を一度は決意なされたのですが、中将どのはご承知のように女々しいお方。ご妻千にひと目お会いしてから、などと申し出されて京へ使者を送りました。そして僧都が今日、吉報をもたらされました。もはや中将どの心は、いちずに都の空を駆けめぐっているに相違ございませぬ」

心まどわせる吉報の使者であつた明遍には、主君維盛を補陀落渡海へ驕意させる義務がある。とても言いたげな舎人武里の口ぶりであつた。

このようにいちずに思いこんだ人間を説得したりすることは無益である。それ以上に、こちらが疲れ果てる。「とにかく明日、とくと中将どのと話し合うことにしよう」

適当にいなしておいて、明遍は樹林の闇へひとり歩きますすんだ。

月が現れたのか。樹林は俄かに明るくなった。いくら

歩いても倦まない心楽しい散策であつた。

明遍は静かに足を止めた。

ゆくての小径に黒い固体が動いているのを発見したからだ。

山犬にちがいない。

のろのろと歩き進む。敏捷な動き、生気は全くなかつた。

老いて病んだのであろうか。それとも傷ついた身なのであろうか。

やがて山犬は立ち止まると、奇妙な動作をおこした。

路傍にある大樹の根もと、そこにうず高くつもつた落葉の山を、前肢を掻きはじめたのである。

いったい何をしているのか。餌でも見つけ出したのか。

明遍は立ちすくしたまま山犬の動作を凝視した。

ハッと胸を衝かれるような教示を、明遍は受けた。

落葉の山に、おのれの一身をすっぽり包めるほどの空間をこしらえた山犬は、静かにそこへ横たわると、なお前肢で落葉を掻き寄せ、おのれの身体をおおいかくす作業をつづけた。

山犬は死期をさとつたにちがいない。それも、天寿を

完うした自然死である。

山犬は自らの手で、安らかな死所を得、醜くい死体を自らの手でおおいかくそうとするのである。

落葉の下で、やがて山犬は白骨化し、土に帰ってゆくことであらう。

他人にはいっさい迷惑をかけない往生のすがたであつた。

あの山犬に比べて、人間の死は何という醜さであらうか。大騒ぎをして病み苦しみ、なかには五体満足の身を、みずから断絶させようとさえする。

この高野をひらいた弘法大師は、承和元年の十一月十五日、弟子らを集めて予言したと言う。

「吾れ、入滅せんと擬するは、今年（明年）三月二十一日寅の刻なり、もろもろの弟子等、悲泣するなかれ」

そして年が明けた正月ごろから食物はもちろん水さえ摂するようになり、きっかり予言の日、その刻限に息を引き取った。

老い病んだ空海の肉体が食物や水分を吸収し得なくなつたのか。それとも彼の意志か、それをさせたのか。

もしも後者であつたとすると、明遍は大師を疑わずに

はいられなくなる。それは、自殺だからである。

仏にすべてをゆだねた身を自覚したとき、軽々しく自らの生命を断つたりして良いものであらうか。あの山犬の方が、遙かに見事な往生の素懷を遂げたことになりはすまいか。

人を救うのが仏者のつとめであるならば、息のあるあいだ、いかに生きざまが苦しくてもそれに耐えて、生きぬいて、ぎりぎりの努力をするのが正しい姿であらう。

何を目的として生きぬいたかは、知らない。しかしあの山犬は、卑小な人間などを寄せつけない見事な人生を全うしたことになる。いや、ただに限るまい。この山野に棲息する禽獣虫魚のすべてが、精一杯に生きて、そしてもの静かに死んでゆくのである。

むなししいのは、人の生きざまのみである。

四

小松中将維盛に会う前、明遍は俊乗房重源を、その精舎に訪れた。翌くる朝まだきであつた。

滝口入道とは、どんな人物なのか、聞き出しておきたかつた。

重源の説明によると、入道はもと小松内府重盛の家臣だった。主臣に随って禁裏へ出入りしているうちに、ひとりの若い女性を見染めた。高倉帝へ入第した建礼門院の侍女、十七才になる横笛である。

若い二人は激しく愛し合った。これを知った父親にきびしく諫言された。平家の武士が、禁裏の官女と通ずるとは重大な不祥事である。ひいてはわが家も断絶するであらう。

時頼は諦らめて出家剃髪する。ところが横笛は、彼が隠棲した嵯峨の法輪寺まで追ってくる。

時頼は絶対に会おうとしない。

なまじ京都にいるから横笛の追慕が断ち切れぬと考え、高野山へ去ったのである。

そのころ横笛は、すでに法輪寺に近い大井川に身を投げて若い生涯を果てさせていた。

一説には、滝口入道はその水死体を拾い上げ、焼いた骨を胸に高野山へ登った、ともある。

高野へきても横笛の追慕はやまず、鶯に化身して朝な夕な、滝口入道の隠所へ飛び来っては美しくも悲しい声で啼きさえする、というのである。

滝口入道と横笛の純愛ドラマは、「平家物語」が描いた極点のロマンスであって、当然その主人公たる滝口入道は多分に美化されつくしている。

ただし造作の匂いが濃く、理由も後年滝口が高野ひじりの統領のようになったため、輩下のひじりたちが言いふらしたもののらしい。

だから重源もそんなロマンスは明遍に告げなかったはずである。

武士の地位を女性で失敗して出家遁世、ぐらゐの説明だったであらう。かえって重源は、高野ひじりのあいだで勢力を強めてゆく滝口入道に警戒的な口吻は洩らしたはずである。

「小松中将の侍者が、補陀落渡海のことを語っていたが」

と、明遍は昨夜の出会いを告げた。

「うむ。あり得ることだ。小松どのを主君と仰ぐ滝口としては、つまらぬ死に方をされては困るわけだから」重源は鋭く滝口入道の人物像をえぐってゆくのであった。

二 編集後記 二

○寒明（かんあけ）といえは、寒の三十日が終ること、一般には立春になると「寒が明けた」といって、暦の上ではもう春である。しかし「春立つ」といっても、寒さの厳しさは、この時節こそひとしおである。「早春賦」に、「春は名のみの 風の寒さや」と歌われるのもしかりで、さらには「さては時ぞと思うあやにく 今日もきのうも雪の空」とは、まだまだ寒気厳しい如月（きさらぎ）の風趣をよく写している。

寒明けの墓塚にさす入日かな 洪亭
春浅き水を渉るや驚一つ 碧梧桐

○たしかに、北国の重く暗い冬はまだ続いている。しかも北風の舞い踊る日々は、太平洋に面した暖かい地方にも幾日かは続く。外套の襟を立て、乾いたブーツの音を立てながら街を行く人々は、当然のことながら防寒に懸命である。このような季節であればこそ、私たちの寒さを癒すのは、人の心

の暖かい思いやりである。まごころから発せられたやさしい言葉に、私たちの心はほえんととける。そんな折、春告鳥（うぐいす）の清きさえずりが聞え、白梅の百花に先がけた可憐なほころびが見える。こうして待ち望む春は、私たちの心の中からやってくるのである。

○さて、二月二十八日は浄土宗の第二祖鎮西上人の忌日である。聖光房弁長、つまり弁阿鎮西上人は、応保二年（一一六二）に九州筑前で生まれ、仁安三年（一一六八）、善提寺の妙法法師の弟子となり、その後嘉永二年（一一八三）には比叡山に登り宝地房証真の門に入り、一時帰郷してから建久八年（一一九七）再び京に上り、この折宗祖法然上人の禪室に参じたのである。爾来六カ年宗祖に従い、元久元年（一二〇四）、九州に帰ってからは筑前、筑後、肥後等に念仏を伝え、嘉禎四年（一二三八）に七十歳の生涯を終えたのである。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十二年一月二十五日 印刷

昭和五十二年二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒〇三 振替東京八一八二一八七番

＝新刊＝

大正大学教授 安居香山 著

『予言と革命 —ここにも大変革の危機がある—』

B 6 判 250頁 定価 850円

- ◎ 予言の書「緯書」の研究者である著者が、自然的破滅でなく人間自身による日本滅亡の危機のあることを、中国・日本の歴史を辿りながら、予言や易の流行する現代社会に訴えた問題の書!!

——目次——

○ここにも大変革の予言がある○予言で定められた日本の紀元
○世直しの改元と予言○予言にゆらいだ日本の歴史○予言で亡んだ始皇帝○中国の歴史を左右した予言革命○予言はどうして歴史を動かすか○予言革命の温床○現代でも予言革命はおこる

〒605 京都市東山区清閑寺山内46-5

発売元 探 究 社

中住ビル3F

(振替) 京都 21185

漢和对訳 『和訳浄土三部経』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・注解つき

『浄土宗檀信徒用のおつとめ』

折本 68 頁 定価 190 円 (100部以上一割引)

折本 80 頁 〈小消息つき〉 定価 220 円 (100部以上一割引)

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振 替 (東 京) 8 - 8 2 1 8 7